

常なる磐

つねなる いわ seasonⅡ

令和3年7月16日(金)

◇ 部活動の思い出

中学校市長杯の役員として大会に参加し、久しぶりにハンドボール競技に触れた。澆漑とした中学生のプレーに加え、礼儀正しいマナーが競技に花を添える。いいものを見させてもらった。そして、エネルギーをもらった。

さて、タイトルの話。競技者としての思い出もいくつかあるが、「忘れられない」という形容詞が付くのは、部活動指導者として思い出ばかり。中でも筆頭の話。

もう20年以上前、R中ハンドボール部顧問としての思い出話。新人戦、桜祭り大会(当時の4月の大会)と市内大会を連覇し、総体に向けた仕上げのGWの練習試合で、キャプテンの正ゴールキーパーAが負傷する。脱臼癖のあったAだが、今回は重症。手がまともにあげられないばかりか、ボールを投げることもできない。普通なら、この時点でチームが意気消沈するところだが、このチームは少し違った。もう一枚の切り札がある。双壁の鉄壁GKのBだ。



AとBは、互いが意識するライバルとして常に競ってきた。技術は双壁。「やられた」と思った瞬間のシュートをスーパーセーブでチームを救うのは、むしろBの方が多かった。対してAは常に冷静。ミスが重なり、チームが浮足立つ気配を察するや、肝となるキャプテンAの掛け声が飛ぶ。両者とも類まれな持ち味がある。二人の起用にはいつも迷ったものだが、今回はBに託すしかなくなった。

しかし、翌日の練習からBの調子がおかしい。簡単なミスを繰り返し、表情は曇る一方だ。そう。Bが安心してプレーできていたのは、「自分の後にはAがいる」という安心感が最大の支え。そのAがプレーできないことへの不安に加え、「Aの分まで自分がやらねば」という思いがプレッシャーとなり、Bに押し掛かっていた。

どうにかBを励まそうと自分が考えたのは、正ゴールキーパーとしての位置をBに示し、明確にすること。つまり、チーム結成以来、Bが背負ってきた控えゴールキーパーの背番号【12】に代え、【1】番を与えることだ。しかし、諸刃の剣。Bに余計にプレッシャーを加えることにもなることも覚悟し、Bを呼び寄せる。

Bが名簿の筆頭にある大会の登録用紙を携え、Bに話し掛ける。

「これまでよく努力し、力をつけた。そこで、総体の背番号だが……」と話を切り出すと、その後の話を悟ったように、口元を引き締めたBは、目をぐっと見開いた。そのBの目を見て、自分は、「これは、いい方向に転じる」とその後の展開を瞬時に予想し、話を続ける。

「……1番をつけてもらう。

間違えるなよ。Aが怪我をしたからではない。

今回は自分で勝ち取った背番号1だ。ただし、Aの分まで頑張ってくれ。」

「はい。ありがとうございます。Aの分まで頑張ります。」

その後のBの返答まで予想し、登録用紙をBに見せようと準備をしていると、それまで黙っていたBが口を開く。そのBから返ってきた言葉は、全くの想定外のものであった。

「先生、1番はAのものです。だからもらえません。」Bは、さらに続ける。

「1番は欲しかったし、1番をもらおうとずっと頑張ってきました。

でも、やっぱり1番が似合うのはAです。」

「いらないんじゃないですか。もらえません。 12番を僕にください。」

Bは、ライバルAのおかげで自分が成長できていることをちゃんと分っていた。

自分の大きな勘違い。Aを戦力として失い、焦っていたのは選手たちではなく、自分の方だった。大失敗するところを、自分はBに助けてもらったようなものだ。

「そう言うと思ったよ……。」と、自分。 大人は本当にずるいのだ。

約2週間後の総体は、Bの大活躍もあり、そしてベンチでいつも通りチームを鼓舞するAの声のおかげでチームは優勝。Aも試合に出て、市内三連覇を果たす。

Aのその後は、教員養成大学に進学して教員となり、現在も活躍中だ。ハンドボールをバレーボールに持ち替え、今や、押しも押されぬバレーの名監督。岡崎の東方、T中で名采配を振るい、子供を檜舞台に立たせ続けている。

Bは地元R中の近くの「さいくるぴっと〇〇〇〇」で家業を継ぎ、店長として活躍中。相手を立てる商売の腕前は当時そのもので、お店は大繁盛だとか。

教員として、商売人として。20年の時を経て二人は「岡崎のエース」になった。